

2021年7月9日

各位

公益財団法人 大同生命国際文化基金
理事長 北原 睦朗

2021年度（第36回）大同生命地域研究賞 受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：北原睦朗）では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。

受賞者および、賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：2021年7月27日（火） 14:00～

場所：一般社団法人 『クラブ関西』

大阪市北区堂島浜1丁目3-11 TEL：06(6341)5031

※新型コロナウイルス感染拡大防止に向け、贈呈式は感染防止対策を行い、少人数および短時間での開催を予定しており、贈呈式後の懇親会等の開催は控えさせていただきます。

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

○京都大学 名誉教授

市川 光雄 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

○国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授

上羽 陽子 氏

○国立民族学博物館 学術資源研究開発センター 准教授

小野 林太郎 氏

○国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授

川瀬 慈 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

○美術家

福本 繁樹 氏

○歴史研究者（真珠史・ギアナ高地史）

山田 篤美 氏

以上

お問合せ先：公益財団法人 大同生命国際文化基金 事務局（阪東） TEL: 06(6447)6357

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためにいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニア(ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域)。

3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです(本年度は受賞者2名)。

4. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。2021年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

早稲田大学人間科学学術院教授・東京大学名誉教授	井上 真 氏
国立民族学博物館名誉教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部教授・同大学図書館館長	臼杵 陽 氏
独立行政法人日本学術振興会監事	小長谷 有紀 氏
京都大学名誉教授	松田 素二 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2021年度
大同生命地域研究賞 受賞者

◆大同生命地域研究賞（1名）

「アフリカの熱帯雨林と先住民の共存に関する総合的地域研究」

○京都大学 名誉教授 いちかわ みつお
市川 光雄 氏

◆大同生命地域研究奨励賞（3名）

「現代インドにおける染織文化の変容動態の研究」

○国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授 うえば ようこ
上羽 陽子 氏

「東南アジア海域における海産資源利用の人類・考古学的研究」

○国立民族学博物館 学術資源研究開発センター 准教授 おの りんたろう
小野 林太郎 氏

「民族誌映画の革新的制作を通じたアフリカ地域研究の新分野開拓」

○国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授 かわせ いつし
川瀬 慈 氏

◆大同生命地域研究特別賞（2名）

「オセアニア伝統造形芸術の調査研究及び普及活動の功績」

○美術家 ふくもと しげき
福本 繁樹 氏

「美と富を求める人類史としての地域研究の探求」

○歴史研究者(真珠史、ギアナ高地史) やまだ あつみ
山田 篤美 氏

2021年度
大同生命地域研究賞

市川 光雄 氏

京都大学 名誉教授

略 歴

市川 光雄（いちかわ みつお）

1. 現 職：京都大学 名誉教授
2. 最終学歴：京都大学大学院博士課程（1976年）
3. 主要職歴：1978年 助手
1986年 京都大学アフリカ地域研究センター 助教授
1996年 京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
1998年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授
2010年 京都大学 名誉教授
2011年 財団法人日本モンキーセンター所長
2014年 財団法人日本モンキーセンター所長 退任
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『森の目が世界を問う—アフリカ熱帯雨林の保全と先住民』（京都大学学術出版会、単著、2021）
 - ②*Utilization and Potentials of Non-timber Forest Products and Wildlife in Southeast Cameroon (African Study Monographs, suppl. issu., 60, 共編著：H. Yasuoka and M. Ichikawa, 2020).*
 - ③Hunting and gathering as techniques (In: Callan, H. ed., *The International Encyclopedia of Anthropology*, John Wiley & Sons, 単著, 2017).
 - ④Bushmeat crisis, forestry reforms and contemporary hunting among central African forest hunters (In: V. Reyes-García and A. Pyhälä, eds., *Hunter-gatherers in a Changing World*, Springer, 共著, M. Ichikawa, S. Hattori and H. Yasuoka, 2017)
 - ⑤Environmental knowledge among central African hunter-gatherers (In: R. Whallon, W. A. Lovis and R. K. Hitchcock, eds, *Information and Its Role in Hunter-Gatherer Bands*, 共著, M. Ichikawa, S. Hattori and H. Yasuoka, 2011).
 - ⑥「人間の生活環境としての熱帯雨林—歴史生態学的アプローチ」『文化人類学（旧民族学研究）』74(4), 単著, 2010).
 - ⑦L'évitement alimentaire des viandes d' animaux sauvages chez les chasseurs-cueilleurs d'Afrique centrale. (In: E. Dounias, E. Motte-Florac et M. Mesnil, eds. *Le symbolisme des animaux, L' IRD*, 単著, 2007).
 - ⑧Problems in the Conservation of Rainforests in Cameroon. *African Study Monographs*, suppl. issu., 33, 単著, 2006)
 - ⑨The Japanese tradition of central African hunter-gatherer studies: with comparative observation on the French and American traditions (In: A. Barnard, ed., *Hunter-Gatherers in History, Archaeology and Anthropology*, Oxford: Berg Publishers, 単著, 2004).

- ⑩Comparative ethnobotany of the Mbuti and Efe hunter-gatherers in the Ituri Forest, DRC. (*African Study Monographs*, 24-1/2. 共著, H. Terashima and M. Ichikawa, 2003).
- ⑪Persisting cultures and contemporary problems among African hunter-gatherers. (*African Study Monographs*, suppl. issu., 26, 共編著, M. Ichikawa, D. Kimura and J. Tanaka, 2001).
- ⑫『森と人の共存世界』(市川光雄・佐藤弘明, 共編著、京都大学出版会、2001)
- ⑬Man and Nature in Central African Forests, (*African Study Monographs*, suppl. issu..25, M. Ichikawa, ed., 編著、1998).
- ⑭“Interest in the Present” in the nationwide monetary economy: the case of Mbuti hunters in Zaire (In:P. Schweitzer, M. Biesele and R. K. Hitchcock, eds., *Hunters and Gatherers in the Modern World*. Berghahn, Oxford, 単著、2000) .
- ⑮Cultural diversity in the use of plants by Mbuti hunter-gatherers in northeastern Zaire. (In: S. Kented. *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers*, Cambridge University Press, 共著, M. Ichikawa and H. Terashima, 1996) .
- ⑯Co-existence of man and nature in the African rain forest. (In: K. Fukui and R. Ellen eds. *Redefining Nature: Ecology. Culture and Domestication*, Berg Publishers、単著, 1996).
- ⑰『生態人類学を学ぶ人のために』(秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎、世界思想社、共編著、1995) .
- ⑱『人類の起源と進化』(共著、黒田末寿、市川光雄、片山一道、有斐閣、1987) .
- ⑲『森の狩猟民—ムブティ・ピグミーの生活』(人文書院、単著、1982)
- ⑳The residential groups of the Mbuti Pygmies (*Senri Ethnological Studies*, no.1, 単著, 1978) .

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 1979 年 理学博士 (京都大学)

業績紹介

「アフリカの熱帯雨林と先住民の共存に関する総合的地域研究」に対して

市川光雄氏は1974年から現在まで50年近くにわたり、コンゴ民主共和国のイトウリの森のムブティやカメルーン東南部のバカなどの、中央アフリカの先住民である狩猟採集社会に関する研究に取り組んできた。同氏の学問的功績は、対象地域の生態系と社会への理解を試み、生態学的手法を基盤としつつ学際的かつ質の高い研究成果として公表し、それを「3つの生態学」として提示したことにある。つまり、総合的地域研究の展開プロセスや枠組みを、自らの研究成果をもって後進たちに説得力ある形で示したのである。

まず「文化生態学」的な研究では、当該地域の人びとが自然をどう認識・利用しているか、また森林環境とどのような関係を保ちながら社会生活を営んでいるかといった点について明らかにしてきた。それは、人々の狩猟採集活動の詳細な記録であるとともに、状況に応じた柔軟な社会編成、互酬性と平等性を基礎にした社会生活・食生活を彩る多様な動植物の利用、それらの文化的意味などについて克明に記述・分析したものである。これは、宗教や社会構造の記載に偏っていた先行研究において見過ごされていた側面を描いた業績として高く評価される。

同氏は、1980年代からは研究をさらに発展させ、野生植物に関する利用と知識に関する組織的な調査に着手した。すなわち、植物利用にみられる集団間の変異と多様性を示し、それらを生み出した社会的背景を分析する一方で、熱帯雨林の植物が有する多様な潜在力を記録・保存するために、共同研究者とともに「アフロラ」と称する熱帯アフリカにおける伝統的植物利用のデータベースの構築に携わってきた。

次に「歴史生態学」的な研究、すなわち人と自然の相互作用の通時的側面の研究では、(1)熱帯雨林の植生には人為の関与を窺わせる二次林性の植生が広汎に分布すること、(2)森の住民が利用する主要な食用植物の多くが原生林よりも二次林的な環境に多く分布すること、(3)キャンプや村の跡地は日当たりがよく、さまざまな生活廃棄物質が集積されて土壌が肥沃化していること、(4)そして人間の廃棄した食物残渣から多くの植物が芽生えること、などを明らかにした。これは、人間の生活環境としての森林が人為の介入によって改善されている側面があるという極めて重要な指摘である。これらの成果は、人間を自然に対立する破壊者とのみ位置づけ、人間活動を排除することが自然保護であるとする西欧的な認識とは一線を画し、人間と自然との共存の可能性を示唆するものである。

このような人間と自然との関係は、より広い社会の政治・経済の動きと無縁ではない。そこで、同氏の研究は「政治生態学」的な研究へと展開した。つまり、狩猟採集社会をはじめとする小規模社会の諸現象を、国家や国際社会の政治・経済状況との関連のなかで理解する研究である。とりわけ、コンゴ盆地最奥部の森林において、商品経済の浸透により狩猟採集生活が変容するなかで、相変わらず以前からの交換レートに基づいた物々交換が継続していたこと、またそうした安定した物々交換システムが狩猟採集民に特有な「現在に向けられた関心」によって維持されていること、などを明らかにした。このような研究は、極度のインフレや賃金・物価の変動に見舞われたコンゴ民主共和国の不安定な状況のなかで、一見すると後進的に見える物々交換や狩猟採集民の生活スタイルが、実は安定した地域の生活と生態系を維持するためのバッファーとして大きな役割を果たしうることを示す重要な学問的貢献といえる。

これらの研究成果は、5冊の和書（単著・共編著）、6冊の African Study Monographs, (Supplementary Issue)（単編・共編）、そして多数の論文で公表され、国際的な評価を得ている。そして、総括的な成果の一端は『森の目が世界を問う—アフリカ熱帯雨林の保全と先住民』（2021年、単著、京都大学学術出版会）として将来の課題も含めてわかりやすく整理されている。

さらに、科研費や21世紀COEプログラム等を通してアフリカ熱帯雨林における地域研究を主導し、多くの若手研究者の育成にも貢献してきた。

以上の理由から、選考委員会は大同生命地域研究賞の授与を決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2021年度
大同生命地域研究奨励賞

上羽 陽子 氏

国立民族学博物館人類文明誌研究部 准教授

略 歴

上羽 陽子（うえば ようこ）

1. 現 職：国立民族学博物館 人類文明誌研究部 准教授
2. 最終学歴：大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002年）
3. 主要職歴：2002年 大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員
2003年 大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師
2003年 大阪市クラフトパーク織物工房 非常勤指導員
2008年 国立民族学博物館文化資源研究センター 助教
2013年 国立民族学博物館文化資源研究センター 准教授
2017年 国立民族学博物館人類学文明誌研究部 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』（山崎明子と共編、上羽は第一編者）、フィルムアート社、2020年、編著
 - ②『『手芸的なるもの』を探る』上羽陽子、山崎明子（編）『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』、pp. 9-27、フィルムアート社、2020年、単著
 - ③“Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India” in Nakatani, Ayami ed. *Fashionable traditions: Asian handmade textiles in motion*, Lanham: Lexington Books. pp. 235-251、2020年、単著
 - ④『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（中牧弘允、中山京子、藤原孝章、森茂岳雄と共編、上羽は第一編者）（国立民族学博物館調査報告（SER）138号）、国立民族学博物館、2016年、編著
 - ⑤『『見方』を開発——インドの染織資料が見えてくる』『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告（SER）138号）、国立民族学博物館、pp. 69-76、2016年、単著
 - ⑥『インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ』、臨川書店、2015年、単著
 - ⑦「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)、pp. 1-51、2012年、単著
 - ⑧「NGO商品を作らないという選択——インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」（地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会）『地域研究』vol. 10 no. 2、pp. 204-223、昭和堂、2010年、単著
 - ⑨「インド西部ラバーリーの女神祭礼における刺繍布の変化について」『鹿島美術研究年報』26号、pp. 346-357、財団法人鹿島美術財団、2009年、単著
 - ⑩「牧畜民の繊維利用——インド西部ラバーリーを事例に」『ビオストーリー』vol. 12、pp. 30-37、生き物文化誌学会、2009年、単著
 - ⑪「暮らしと技法からみる刺繍布」三尾稔、金谷美和、中谷純江（編）『インド刺繍布のきらめき——バシンコレクションに見る手仕事の世界—』pp. 16-55、昭和堂、2008年、単著

⑫『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』、
昭和堂、2006年、単著

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考：2002年 芸術文化学博士（大阪芸術大学）

業績紹介

「現代インドにおける染織文化の変容動態の研究」に対して

上羽陽子氏は、グローバル化がすすむ現代インドの染織文化の変容動向について民族芸術学的視点から実証的に研究してきた。布の製作者でもある同氏は、その経験をいかながら、つくり手の視点から、つくり手の創意工夫や手工芸技術の継承法についてアプローチすることによって、技法から布の役割や機能を明らかにすることに成功している。

同氏の研究の原点は、大学生時代に、インド西部グジャラート州で開催された国際紋織り会議へ赴き、当該地域の多様な染織品とであったことにある。そこでは当時、一般に染織のなかでは芸術性が低いと捉えられがちな、刺繍・アップリケ・編物など、日本で手芸と呼ばれる造形物の価値を見直すこととなった。言い換えれば、手芸とはなにか、繊維をもちいた造形物におけるヒエラルキーはどのようにして生まれるのか、といった大きな問いが生まれ、同州カッチ県のラバーリーの刺繍布を調査するきっかけとなった。

上羽氏の研究スタイルの特徴は、調査地で製作技術を習得し、その過程で知り得た情報をもとに考察する点にある。大学院生時代は牧畜を主な生業とするラバーリーのもとで、衣装製作や刺繍、糸紡ぎ、編み、織りの製作技術を総合的にまなび、ラバーリー社会における染織品の機能や役割について明らかにした。この博士号請求論文をもとに出版された『インド、ラバーリー社会の染織と儀礼—ラクダとともに生きる人びと』（2006年、昭和堂）には、「第4回木村重信民族芸術学会賞」が与えられ、インド地域における民族芸術学や染織研究という分野において新たな地平の一端を切り開くとして高く評価された。

同氏が調査を開始した1990年代後半のインドは1991年の経済自由化によって手仕事の現場に大きな変化が起きていた転換期であった。そこで、彼女は、製作者たちが伝統的形態を継承しながらも、現代的な要素をいかに選択しているかに注視し、モノと人との関係を明らかにした。その成果は、“Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India” in Nakatani, Ayami ed. *Fashionable traditions: Asian handmade textiles in motion* (2002, Lanham: Lexington Books. pp. 235-251) など英語でも発表されている。

同研究はさらに、大学共同利用機関法人人間文化研究機構地域研究推進事業のもとで展開され、その成果は、今秋開催予定の国立民族学博物館企画展「躍動するインド世界の布」（2021年10月28日～2022年1月25日）にて発表される予定である。当該、関

連書籍として、布を切り口としたインド社会論としてまとめられた編著『躍動するインド世界の布（仮）』（金谷美和共編）も出版される予定である。

同氏は研究の原点である「手芸とはなにか」に迫る目的で、ラバーリーの染織文化研究を共同研究へと発展させ、文化人類学、ジェンダー研究、美術・工芸史、ファッション研究などの諸分野の研究者や繊維造形作家たちとともに、『現代手芸考—ものづくりの意味を問い直す』（山崎明子共編、フィルムアート社、2020年）を発表している。「つくる」「教える」「仕分ける」「稼ぐ」「飾る」「つながる」という身体的なテーマと、「技術」「伝承」「アイデンティティ」「社会階層」「自己表現」「社会空間」という社会的課題とを組み合わせることで、既存の文化や芸術の枠組みを再考し、ものづくりの意味を浮かび上がらせようとする新たな研究領域の開拓を試みた。それは同時に、地域的な広がりへの展開でもあった。

上羽氏の研究スタイルのもう一つの特徴は、成果をつねにワークショップなど実践的に社会に還元し、その場をフィールドとする研究をも進めるという点である。2009年には、国立民族学博物館企画展「インド刺繍布のきらめき—バシン・コレクションに見る手仕事の世界」そのものならびに関連ワークショップについて、企画立案と運営を担当した。インド西部の人びとの刺繍布を中心とした在来知識を、どのように実践的に他者に伝わるかを工夫した。文字による解説でなく、布・糸・針を使って工程を再現した刺繍技術解説パネルの考案などは、博物館来館者に技術体験させる新方式として評価され「意匠学会作品賞」を受賞した。

同氏は2018年より民族芸術学会の学会誌編集理事を務め、編集主幹として学会誌のリニューアルに携わり、『民族芸術学会誌 art/』を刊行するなど、学会の発展にも少なからず寄与している。

以上のような上羽陽子氏の研究実績や学術活動を高く評価し、民族芸術学からの地域研究へのさらなる貢献に期待して、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2021年度
大同生命地域研究奨励賞

小野 林太郎 氏

国立民族学博物館学術資源研究開発センター 准教授

略 歴

小野 林太郎（おの りんたろう）

1. 現 職：国立民族学博物館 学術資源研究開発センター 准教授
2. 最終学歴：上智大学大学院・外国語学研究科地域研究専攻・博士後期課程
満期退学（2003年）
3. 主要職歴：2003年 日本学術振興会 特別研究員（PD）
2008年 日本学術振興会 海外特別研究員 PD
2010年 東海大学海洋学部 専任講師
2014年 東海大学海洋学部 准教授
2019年 国立民族学博物館人類文明誌研究部 准教授
2021年 国立民族学博物館学術資源研究開発センター 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①Development of bone and lithic technologies by anatomically modern humans during the late Pleistocene to Holocene in Sulawesi and Wallacea [*Quaternary International* 596:124-143, 他6名との共著 2021]
 - ②*Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation* [IntecOpen Publisher A. Pawlikとの共編著、2020]
 - ③Island migration and foraging behaviour by anatomically modern humans during the late Pleistocene to Holocene in Wallacea: New evidence from Central Sulawesi, Indonesia. [*Quaternary International* 554:90-106, 他7名との共著、2020]
 - ④Lapita maritime adaptations and the development of fishing technology: A view from Vanuatu, Bedford, S. and M. Spriggs eds, *Debating Lapita: Chronology, Society and Subsistence* [Terra Australis Series 52, ANU Press, pp. 415-438, S. Hawkins・S. Bedfordとの共著 2019]
 - ⑤Technological and behavioural complexity in expedient industries: The importance of use-wear analysis for understanding flake assemblages. [*Journal of Archaeological Science* 112, 他8名との共著、2019]
 - ⑥Traces of Early Austronesian Expansion to East Indonesia? New Findings of Dentate-Stamped and Lime Infilled Pottery from Central Sulawesi. [*Journal of Island and Coastal Archaeology* 14(1): 123-129、他6名との共著、2019]
 - ⑦Coastal Subsistence Strategies and Mangrove Swamp Evolution at Bubog I Rockshelter (Ilin Island, Mindoro, Philippines) from the Late Pleistocene to the mid-Holocene. [*Journal of Island and Coastal Archaeology* 14(4):584-604、他7名との共著、2019]
 - ⑧Development of pottery making tradition and maritime networks during the Early Metal Ages in Northern Maluku Islands. [*AMERTA* 35 (2): 109-122、他6名との共著、2018]

- ⑨『海の人類史：東南アジア・オセアニア海域の考古学 増補改訂版』〔雄山閣、2018〕
- ⑩『海民の移動誌—西太平洋のネットワーク社会』〔昭和堂、長津一史・印東道子との共編著、2018〕
- ⑪『海洋考古学入門—方法と実践』〔東海大学出版部、木村淳・丸山真史との共編著 2018〕
- ⑫Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania— jar burials from Aru Manara, northern Moluccas. [*Antiquity* 92 (364):1023–1039、他5名との共著、2018]
- ⑬*Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Regions*. [ANU Press、A. Morrison, D. Addison との共編著 2013]
- ⑭Pelagic Fishing at 42,000 Years Before the Present and the Maritime Skills of Modern Humans. [*Science* 334:1117–1121、S. O’ Connor, C. Clarkson との共著、2011]
- ⑮『海域世界の地域研究：海民と漁撈の民族考古学』〔京都大学学術出版会、2011〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2006年 博士（地域研究）（上智大学）

業績紹介

「東南アジア海域における海産資源利用の人類・考古学的研究」に対して

小野林太郎氏は、人類史的視点に基づく海域研究の枠組みを設定し、主として東南アジア島嶼部で考古学調査を精力的に展開している。その調査対象地域は広く、年代的にも更新世代から完新世代まで数万年におよぶ。

人類の拡散移動史を解明する際、東南アジア海域（ウォーレシア）は極めて重要な地域である。特に、人類がオセアニア海域へと移動する前後に世界で初めて海を越えた地域であったことから、人類と海の関係、海洋資源の利用、渡海技術など、多くの興味深い人類学的研究課題を提供している。しかし、島嶼域であることに加え、海面変動の影響もあり、数万年におよぶ人類の痕跡を探すには非常な困難を伴う。人類がどのルートを通して移動したのかは人類遺跡の発掘から探るしかなく、年代を提供する遺跡数が増加することでその移動経路の解明が可能になる。

これまで小野氏は、人間居住の痕跡を求めて東南アジア島嶼部を中心に計 8 か国で 20 遺跡以上の発掘調査に従事してきた。また調査許可を取るのが非常に困難なマレーシアやインドネシアで考古学調査を継続的に行っている外国人研究者は極めて少なく、日本人としては唯一である。特に、インドネシアでは 15 年以上にわたり、現地の研究機関との共同調査を継続している。豊富な調査成果は、更新世（考古学的には旧石器時代）にさかのぼる現生人類（ホモ・サピエンス）の移動ルートの解明に資する遺跡の発見と発掘、魚類を中心とした海洋資源利用の多様性などに関する新知見を多く含み、多数の学術論文を国内外で発表している。

小野氏の研究の特徴の一つは、魚骨鑑定専門的知識を積極的に活用していることである。遺跡から出土する魚骨類は、そこで生活していた人類が食料としていたことを意味し、魚種を復元できれば、その生息域から当時使われた漁法を推測することも可能になる。氏の魚骨鑑定能力は高く評価されており、海外の考古学者からの分析依頼も多い。それらに応じることによって、人類の海洋資源利用の歴史研究を大いに進展させている。これまで東南アジア島嶼部のみならず、オセアニアの 10 を超える遺跡から発掘された魚骨の鑑定協力をおこなってきた。中でも、東ティモールから発掘された旧石器時代の魚骨資料鑑定では、42,000 年前には人類がすでにマグロ類をとらえて食用としていた世界最古の事例として *Science* に発表して国際的に話題になった。一人の考古学者が調査できる遺跡数には限りがあるが、このような鑑定協力を行うことによって、各地で発掘を行う考古学者との共同研究をすすめて資料や研究範囲の拡大を進めるメリットは大きく、将来的な研究展開に大きな期待がもたれる。

小野氏の研究のもう一つの特徴は、人類の海産資源利用史の解明のため、民族考古学的アプローチを積極的に取り入れる姿勢である。東南アジア海域における数万年に及ぶ人類の海産資源利用の歴史を、考古学的資料には残らない民族学的資料の側面から解明しようとするものである。氏は、ボルネオ島で新石器時代の遺跡を発掘した後、約半年間にわたって同遺跡周辺の海民バジャウ村落に住み込み、サンゴ礁漁労に関する定量的データを収集した。この民族考古学的データを基にした英語論文は、現在も被引用率の高い論文となっており、さらに2005年に上智大学に提出した博士号論文をもとにした著書『海域世界の地域研究－海民と漁撈の民族考古学』（地域研究叢書22、京都大学学術出版会、2011年）は、海民研究への新しい視点を提供したものとなっている。

近年は、活動の場をオセアニアへと広げ、メラネシアのヴァヌアツや、ポリネシアのトケラウ諸島での発掘調査のほか、ミクロネシアのポンペイ島で発掘調査を継続中である。2018年には『海の人類史－東南アジア・オセアニア海域の考古学』（増補改訂版、雄山閣）で、人類の海との関わりの歴史を広く紹介した好著を出版している。また、海域世界における人類の移動を理解するため、ネットワークに着目した学際的研究を展開していることも高く評価されている（『海民の移動誌－西太平洋のネットワーク社会』小野他共編、2018年 昭和堂）。

その他、海洋考古学の分野においても活躍中で、水中・海底遺跡に残された人類活動の痕跡を対象とする研究を、沖縄などで行っており、水中文化遺産の保全や活用に関する研究にもその視野を広げて貢献している。

以上のように卓越した研究業績を重ねてきた小野氏が、将来的にも東南アジア島嶼域を対象とした地域研究の国際的牽引者となることが期待できることから、選考委員会は大同生命地域研究奨励賞にふさわしいものとして授与を決定した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2021年度
大同生命地域研究奨励賞

川瀬 慈 氏

国立民族学博物館人類基礎理論研究部 准教授

略 歴

川瀬 慈 (かわせ いつし)

1. 現 職：国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授
2. 最終学歴：京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
五年一貫制博士課程修了（2010年）
3. 主要職歴：2010年 日本学術振興会海外特別研究員（マンチェスター大学）
2012年 国立民族学博物館 助教
2013年 ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 客員教授
2014年 ブレーメン大学人類学・文化調査学部 客員教授
2016年 山東大学人類学科 客員教授
2017年 国立民族学博物館 准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①『叡智の鳥』、Tombac/インスクリプト、2021年
 - ②『エチオピア高原の吟遊詩人 うたに生きるものたち』、音楽之友社、2020年
 - ③【映像作品】『アシェンダ！エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』、2020年
 - ④『あふりこーフィクションの重奏/偏在するアフリカ』、編著、新曜社、2019年
 - ⑤「神々との終わりなきインプロヴィゼーション」、『ジャン・ルーシュー映像人類学の越境者』、千葉文夫・金子遊編、森話社、pp.165-182、2019年
 - ⑥『ストリートの精霊たち』、世界思想社、2018年
 - ⑦ETHNOGRAPHIC FILMMAKING IN ETHIOPIA, the Approach and the Film Reception, In S. Dinslage and S. Thubauville (eds.), *Seeking out wise old men. Six decades of Ethiopian Studies at the Frobenius Institute revisited, Studien zur Kulturkunde* 131, Berlin:Reimer-Verlag. pp. 75-86、2017年
 - ⑧【映像作品】『めばえる歌ー民謡の伝承と創造ー』、2017年
 - ⑨『アフリカン・ポップス！ー文化人類学からみる魅惑の音楽世界』、鈴木裕之との共編著、明石書店、2015年
 - ⑩『フィールド映像術』分藤大翼、村尾静二との共編著、古今書院、2015年
 - ⑪「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画ーエチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例よりー」、『文化人類学』80(1)、pp. 6-19、2015年
 - ⑫The Amharic Oral Poetry by Lalibäločč, *Japanese Review of Cultural Anthropology* Vol. 15. pp. 185-198、2014年
 - ⑬【映像作品】『精霊の馬』、2012年
 - ⑭The Transformation of Musical Activities and Self-imposed Group Markers of Azmari in Ethiopia, *CULTURES SONORES D'AFRIQUE* v, publié sous la direction de Junzo Kawada, Institut de Recherches sur les Cultures Populaires du Japon, Université Kanagawa, Yokohama. pp. 11-31、2008年

⑮【映像作品】『Room 11 Ethiopia Hotel』、2007年

⑯【映像作品】『ラリベロッチー—終わりなき祝福を生きる』、2007年

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備考：2010年 京都大学 博士（地域研究）

業績紹介

「民族誌映画の革新的制作を通じたアフリカ地域研究の新分野開拓」に対して

川瀬慈氏は、未だ方法論が確立したとは言い難い地域研究の領域において、民族誌映画の革新的な制作と上映活動を通じて、新しい分野を開拓し、今後の地域研究の可能性を大きく広げたパイオニア的研究者である。

川瀬氏は、2001年からエチオピア地域社会を対象にして人類学調査を開始し、民族誌映画制作を方法論的支柱として、地域社会の複層的ダイナミズムを明らかにしてきた。そのフィールドは、エチオピア北部を中心としつつ、近年は日本の各地を含み、こうした社会とそこで生きる人々の複雑な実相を、映像を用いた画期的な手法で記録する活動を継続している。

地域研究は多様な問いと枠組みを内包するダイナミックな学問分野だが、重要な柱の一つに、地域に生きる人々の世界の豊饒さについて、苦難と希望を日常のなかから濃密に捉え直すことがあげられる。川瀬氏は、これまで文字と論理を中心に捉えられてきたこの領域に、全く新しい手法と思想にもとづいた映像実践を接続させ、地域研究に新しい分野を切り広げつつある。その重要な貢献は以下の三点である。

第一の貢献は、民族誌映画制作方法の革新的な刷新である。これまで民族誌映画においては、科学的記録として価値を持たせるために、撮影時に被写体（調査対象）に撮影者（調査者）が介入しないこと、また被写体への干渉を隠す制作方法が重視されてきた。被調査者の「ありのまま」の姿を捉えることが「正しい」とされてきたのだが、川瀬氏は、人類学における民族誌記述の批判運動を背景にして、映像制作においても、調査者の存在や主張を隠蔽せず、むしろ調査者と被写体が相互作用する過程を記録する手法を探求した。こうして制作された『ラリベロッチ-終わりなき祝福を生きる-』、『Room 11, Ethiopia Hotel』、『僕らの時代は』、『精霊の馬』等の作品は各国の民族誌映画祭での上映を重ねると同時に、国内外の大学講義で活用され、後進に多大な影響を与えてきた。

第二の貢献は、映像制作に「土地の物差し」の視点を導入したことだ。これまで民族誌映画制作の理論的前提は、この学問を作り出した西欧近代的なアート論であった。それゆえに、民族誌映画が好んで取り上げてきたパフォーマンスは、パフォーマーの内面の自由な精神を表現する実践として捉えられてきた。しかし川瀬氏は、エチオピアの音楽職能集団の地域社会における活動の調査と記録を通して、エチオピア北部の人々にとって音楽は個人の芸術的表現というよりも「神（キリスト教エチオピア正教会における）からの贈り物」という色合いが濃く、音楽は歌い手の「自己表現」ではなく、社会的な

期待を果たす社会的な行為という点から考察することの重要性に気づく。そこから音楽やパフォーマンスを捉えてきた従来の視点自体を相対化するようになる。川瀬氏はそれを映像実践における「土地の物差し」の導入と規定し、以後の研究の方法論的核心に据えた。

第三の貢献は、映像を通じて、多様で相異なる議論を開放する場を創造してきたことだ。川瀬氏が調査対象としてきた人々は、ゴンドールをはじめエチオピア北部社会で周縁化され差別を受けてきた人々である。例えば、吟遊詩人ラリベロッチ、楽師アズマリ、あるいは路上で物売りを行う子供たちや、憑依儀礼の霊媒等である。こうした人々をとらえた作品は、上映の脈絡によっては「アフリカへの偏見を助長する」「国家の恥部を拡散させる」といった批判を受けることもあった。しかし川瀬氏は、作品に対する視聴者からの多種多様な声に真摯に向き合い、作品が喚起する人々の感情や感覚の働き、さらには記憶の深淵を探求することもフィールドワークの重要な局面であると捉える。川瀬氏は、このように自らが制作した作品について、幅広い視聴者と議論することで、新しいフォーラムが創成されると主張して大きな支持を得ている。

以上のような貢献とは別に、川瀬氏には特筆すべき活動がある。一つは、『アシェンダ！エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』、『ザフィマニリストイルのゆくえ』『めばえる歌-民謡の伝承と創造-』等の作品制作を通して、無形文化の記録・保護における民族誌映画の制作と活用を推進する活動である。二つ目は、民族誌映画の普及と水準向上のための活動で、川瀬氏は、欧州で開催される国際的な学術映画祭の審査委員と作品選抜委員を務めることで、革新的な映像制作者を支援・育成してきた。三つ目は、民族誌映画の社会的発信の活動で、2019年度に川瀬氏が中心になって創設されたマルチメディアのオンラインジャーナル TRAJECTORIA は、地域研究、人類学、文化遺産、ミュージアム、アートをつなぐ新しい媒体として国際的な注目を集めている。

以上のように独創的で卓越した研究業績を重ねてきた川瀬氏が優れた研究能力を有していることは明らかであり、将来的にも地域研究のさらなる発展に大きく貢献する研究者として期待できることから、大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2021年度
大同生命地域研究特別賞

福本 繁樹 氏

美術家

略 歴

福本 繁樹 (ふくもと しげき)

1. 現 職：美術家
2. 最終学歴：京都市立芸術大学専攻科（1970年修了）
3. 主要職歴：1970年～ おもに染色による創作活動
1980年～1984年 国立民族学博物館 共同研究員
1998年～2016年 沖縄県立芸術大学 非常勤講師
2011年～2014年 高知大学 非常勤講師
1989年～1997年 大阪芸術大学 助教授
1997年～2017年 大阪芸術大学 教授
2017年～ 金沢美術工芸大学 非常勤講師
2018年～ 立命館大学環太平洋文明研究センター 客員協力研究員
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①「パプアニューギニア、タパ村再訪報告」『環太平洋文明研究』第5号、雄山閣、2021
 - ②「南太平洋のタパ」『織物以前 タパとフェルト』、LIXIL出版、2017
 - ③『福本繁樹作品集 愚のごとく、然りげなく、生るほどに』、淡交社、2017（2019年度意匠学会賞）
 - ④『染色論のすゝめ』、工芸教育研究会、2016
 - ⑤‘TAPA: Tradisi Kain Kulit di Oceania’, Fuya & Tapa: Bark-cloth Traditions in Indonesia & Oceania, Museum Tekstil Jakarta, 2013
 - ⑥『21世紀は工芸がおもしろい』〔(編共著)、求龍堂、2003
 - ⑦「南太平洋メラネシアの仮面」『仮面—そのパワーとメッセージ』、里文出版、2002
 - ⑧「南太平洋の染織文化」『民族藝術』Vol. 14、民族藝術学会、1998
 - ⑨『「染め」の文化 染み染み染みる日本の心』、淡交社、1996
 - ⑩「四章・精霊は地に満ちるオセアニア」『仮面は生きている』、岩波書店、1994
 - ⑪『精霊と土と炎—南太平洋の土器—』、東京美術、1994
 - ⑫『南太平洋・民族の装い』、講談社、1985
 - ⑬『タパ、南太平洋の樹皮布 Tapa in Oceania』、じゅらく染織資料館、1983
 - ⑭「オセアニア 民族美術の宝庫・メラネシアの仮面」『仮面』、講談社、1981
 - ⑮『メラネシアの美術』、求龍堂、1976

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：—

業績紹介

「オセアニア伝統造形芸術の調査研究及び普及活動の功績」に対して

福本繁樹氏は著名な染色美術家で、これまでに国内外の数多くの美術展で受賞している。福本氏は自らの染色芸術活動と共に、オセアニア民族芸術に関する研究者としても広く知られており、学術的に高く評価されている。

1969年にパプアニューギニアへの調査（京都市立美術大学ニューギニア美術調査隊）に参加して以来、1990年にかけて毎年のようにパプアニューギニア、ソロモン諸島、ニューヘブリデス（現ヴァヌアツ）、トロブリアンド諸島などメラネシアを中心に調査を行ってきた。1982年からはフィジーやトンガ、サモア、ハワイなどポリネシアへもその調査地域を広げて、参与観察に基づくフィールドワークによって詳細な観察と資料収集を行ってきた。滞在日数はのべ2年数ヶ月に及んだ。

福本氏が調査対象とした伝統造形芸術は、土器をはじめ、タパとよばれる樹皮布、編布、木像、装身具、貨幣など幅広い領域に及んでいる。氏の研究成果は最初に『メラネシアの美術』（求龍堂、1976年）として出版され、メラネシアのダイナミックな造形美術を一般に広めることに貢献し、現在に至るまでメラネシア美術の基本図書の一冊となっている。また世界的に見てもユニークなニューギニアの土器に焦点を当てた著書『精霊と土と炎—南太平洋の土器』（東京美術、1994年）では、土器の地域性や作成技術、神話との関係などについて詳述し、高く評価されている。

染色家である福本氏がもっとも深く、長く関わってきたのが「タパ」である。クワ科植物の樹皮をたたいて伸ばした表面に、礼装用には氏族に代々受け継がれてきた神話や伝説のモチーフが文様として施される。タパに関する2冊の著書『タパ、南太平洋の樹皮布』（じゅらく染織資料館、1983年）及び『南太平洋・民族の装い』（講談社、1985年）では、タパ作成技術の他、民族と祭り、装いと飾り、身体装飾から染織に至る多様な考察を行い、南太平洋諸民族の「装い文化」を総合的に詳述している。特にヴァヌアツでの調査では、編布にほどこされる「棒締め染め」という複雑な染色法を詳細に記録すると共に、その技法がそれまで南太平洋地域には存在しないとされてきた「絞り染め」の一種であることを指摘し、染色家ならではの重要な発見につながった。このような染色という専門性に裏打ちされた研究成果は、優れて独創的業績である。

大量の収集資料は、国立民族学博物館をはじめ国内有数の博物館や美術館に収蔵され、福本氏の協力を得て頻りに特別展示などに利用され、南太平洋の造形表現の美への興味を喚起する点で非常に大きく貢献している。1970年代前後の南太平洋には、すでに海

外からの商人が入りこみ、マーケットで売られた商品の質は多様であったが、福本コレクションは実際に工芸品を創作する村で直接収集されており、その資料的・芸術的価値は極めて高いと評価されている。

2020年2月には立命館大学環太平洋文明研究センターの共同研究員として、パプアニューギニア北部のタパ作り村を再訪している。氏が南太平洋へ通い始めてから50年の歳月を経ており、半世紀の間にタパ制作がどれほど変化したかを記録すると共に、新しい資料の収集を行う機会でもあった。ところが現実には、観光関連の販売目的にタパを作ることが多くなったことから、タパ作りに男性が参加するようになり、文様にも変化がみられたうえ、タパに関する伝統的知識の喪失も進んでいることが明らかになった。そのため、逆に福本コレクションの価値がさらに高まることになり、近年は韓国やインドネシアでも展示会が行われている。

一方でパプアニューギニアの人々の間でも、自分たちの祖先が作成したタパへの関心が高まっており、現在、パプアニューギニア国立博物館で、福本コレクションの展示計画が検討されている。そのためニューギニアの人々が先人たちの高い芸術性を再確認する機会になることが大いに期待されている。

以上、福本繁樹氏の長年にわたる伝統造形芸術分野を通じたオセアニア地域研究への重要な貢献は、大同生命地域研究特別賞にふさわしいものとして高く評価される。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2021年度
大同生命地域研究特別賞

山田 篤美 氏

歴史研究者(真珠史、ギアナ高地史)

略 歴

山田 篤美（やまだ あつみ）

1. 現 職：歴史研究者（真珠史，ギアナ高地史）
2. 最終学歴：京都大学経済学部卒業
米国オハイオ州立大学大学院ジャーナリズム研究科
修士課程修了（1991年）
3. 主要職歴：著述者、歴史研究者
現在に至る
4. 主な著書・論文：
 - ①山田篤美『真珠の世界史——富と野望の五千年』〔中公新書，2013〕
 - ②山田篤美『黄金郷（エルドラド）伝説——スペインとイギリスの探検帝国主義』〔中公新書，2008〕
 - ③山田篤美『ムガル美術の旅』〔朝日新聞社，1998〕
 - ④山田篤美「天然真珠の大きさと出現率についての考察——アコヤ真珠の場合」〔『宝石学会誌』35(1-4)，2021〕（2021年7月刊行予定）
 - ⑤山田篤美『真珠と16世紀ヨーロッパの対外拡張——真珠のコモディティ・チェーンからの考察』博士論文，2021〕
 - ⑥山田篤美「探検が侵略に変わる時——イギリスが300年狙ったギアナ高地」〔『ラテンアメリカ時報』1408，2014〕
 - ⑦山田篤美「新世界の真珠の歴史的考察——オリエントに代わる真珠の産地の発見と都市形成のメカニズム」〔『第3回全球都市全史研究会報告書』2010〕
 - ⑧Atsumi Yamada, “The Eschatological Symbolism of the Ahmad Yasawi Shrine (in English and Russian)” 〔*Vestnik*, (Almaty, Kazakhstan) 2 (6), 2002〕
 - ⑨山田篤美「タージ・マハル・コンプレクスのプランについての新解釈及びアフマド・ヤサヴィー廟における終末的シンボリズム」〔『アジア・アフリカ言語文化研究』63, 2002〕
 - ⑩山田篤美「令和時代の真珠と万葉集（1～4）」〔『山梨研磨宝飾新聞』2019年9月15日、10月15日、11月15日、12月15日〕
 - ⑪展覧会企画及び監修「History of Pearls——「真珠」価値の変遷」日本橋三越本店，2016年6月15日～6月20日；仙台三越，2017年11月1日～11月7日；名古屋三越，2019年2月13日～26日，銀座三越，2019年12月11日～18日など各地で開催
 - ⑫テレビ出演「知られざる真珠王国・日本」〔『視点・論点』NHK総合及びEテレ，2014年1月7日〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考：2021年 文学博士（大阪大学）

業績紹介

「美と富を求める人類史としての地域研究の探求」に対して

山田篤美氏は、美と富を求める人類の欲望が世界をつないできたことを切り口とする、新しい地域研究を広く社会に提供している著述家である。

同氏の著述家としてのキャリアは、インドに花開いたイスラーム芸術である「ムガル美術」の通史を著すことから始まった。美術史としての地域研究であると言ってよいであろう。16世紀初期から300年以上にわたってインドを支配したイスラーム征服王朝ムガル帝国の建築、庭園、細密画を紹介しながら、それらに通底するシンボリズムについて長期的な変化を解説した本書は、新しい分野の開拓として地域研究の専門家から評価された。とりわけ、芸術に表された世界観や事物から国際関係を読み解く物語として興味深い。

同氏は米国に留学して調査報道のための探索手法を学んだのち、家族の転勤に伴ってベネズエラに移り住んだことを契機として、ギアナ高地に魅せられた人々の歴史に関する読み解き作業に着手した。

具体的には、地図や新聞記事など多様な資料を用いて、大航海時代が始まる15世紀後半から20世紀前半までのおよそ500年にわたって、スペイン人とイギリス人による探険を扱ったベネズエラの世界研究である。スペインとイギリスの競合に注目し、「探険帝国主義」と名付け、地域開発をする側とされる側の関係性を『黄金郷(エルドラド)伝説』という書籍にまとめた。

同書においては、19世紀のベネズエラとイギリスの国境争いが、サー・ウォルター・ローリーによるギアナ探険を嚆矢とする300年の歴史的経緯があることを示すなど、植民地主義の禍根が明らかにされている。

そして、山田氏の真骨頂は、黄金や領土に対する人びとの熱狂を分析し、ダニエル・デフォーのいわゆる『ロビンソン・クルーソー』やコナン・ドイルのSF小説『失われた世界』がいわば広告となって、どのように人々に読まれて南米への興味を駆り立てていたかを明らかにしている点であろう。それはまた同時に、現地に関する情報がどのように作家の想像力を刺激したかを明らかにすることでもある。すなわち、文学の受容や創造にまで考察領域を広げ、地域情報と人々の欲望や行動との相互作用という観点に注目することによって新しい地域研究の可能性を示したのである。

さらに、黄金郷としてのギアナ高地に関する調査過程で、同氏はカリブ海とくにベネズエラ沖が真珠の採取地域として開発されたことに触発され、続いて『真珠の世界史』を上梓することになる。同書は、宝飾を求めた「探険帝国主義」が、ベネズエラ、ペルシア湾、インドなど世界各地における地域開発をもたらしていくとともに、各地域の連関性を明らかにした力作である。

これまで宝飾品のカタログとして総合的な記載はあったものの、真珠とその海域支配をめぐる人類 5000 年の歴史と日本の養殖真珠史 100 年の歴史を扱った通史は同書が初めてである。

16 世紀から 19 世紀にかけて、真珠に憧れていたヨーロッパ人は主要な真珠の産地に進出し、その海域や真珠採りの人々を支配するようになった。しかし、日本の養殖真珠が登場すると、ヨーロッパの真珠ビジネスは瓦解し、代わって「真珠王国」日本が誕生する。つまり、同書は、日本の真珠養殖についても世界各地の地域研究と並列的に扱うことによって、国内産業史の枠を越え、隷属的な潜水夫労働を終焉させるグローバルヒストリーとして位置づけたのである。

このように各地で同時進行する課題を設定すると、扱うべき資料は多様化し、拡散する一方である。その限りない拡散にひるむことなく徹底的に読みこなす勇氣は、アカデミズムに属してこなかった同氏の強みであると言えよう。在野であることを生かして、いずれの学問領域にも縛られることなく、より自由に、より多様な資料を活用し、地域研究の可能性を提示してきた。著作ごとに扱う地域が異なるように見えても、美や富に注目して経済的動機から国際関係を読み解くという視座が最初の著作から一貫して確認される点はきわめて興味深い。

以上のように、山田篤美氏は、美や富への欲望によって引き起こされる地域開発とその相互連関に着目した、新しい地域研究を広く社会に提供しており、大同生命地域研究特別賞にふさわしいものと高く評価される。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

以上